

スチューデント・アパシー概念の再解釈

——知覚された無気力における学業領域の 領域固有の無気力との概念的異同——

長 内 優 樹

アブストラクト：

本論はかつて心理学領域において提唱され、日本において一時的に研究が盛んであったスチューデント・アパシーについて、研究が廃れた理由と現代社会において意義がある概念となるために再解釈を試みたものである。スチューデント・アパシーは、提唱者とされる Walters (1961) による概念の要諦を確認すれば、男子大学生がその本分である学業にのみ選択的に意欲低下をおこすことであるが、この概念は大学進学率が低い時代に大学へ進学し、アカデミアの職を得るほどに学問に傾倒した者が、大学進学率が上昇してきたが、女性の大学進学率が低かった時代の学生を対象に概念化したものといえる。現代社会の状況や価値観から考えると腑に落ちない概念であると考える者も多いだろう。本論では、論点の確認と再解釈の試案を提示する。

キーワード：スチューデント・アパシー、知覚された無気力、領域固有の無気力、就職活動、社会人基礎力

はじめに

「炊飯器の内釜を洗わないとご飯が炊けないが、どうにもその気になれない」「子どもが寝たら仕事の続きをしようと思っていたが、いざ寝たらやる気がでない」「会社の会議の直後はその会議の議題であった案件に対して意欲が高かったが、日常業務に戻ったら途端に出来る範囲でやろう、とやる気が下がってしまった」、「自動車の運転免許の更新に行かなければならないが、いついくのか考えるのも怠い」等、日常生活において自らの意欲の低下ややる気のなさを嘆くことは多く人は経験することがあるだろう。このような意欲の低下ややる気のなさ、やる気のなさ

は「無気力」という語で表すことができるだろう。

学術的な心理学において無気力の研究にあたるものとして、学習性無力感 (learned helplessness) とスチューデント・アパシー (student apathy) がよく知られている。また、その他の研究も両者のいずれかに分類できるというレビューもある (長内, 2010)。ただし、両者の理論的要諦を日常的な語彙で示すと前者は「やってもできないから、やらない、もしくは、やりたくない¹⁾」、後者は「できるかどうかは関係がなく、やらない、もしくは、やりたくない」ということである。さらに、本研究においては重要な問題として、両者は共に研究者が客観的に他者 (ヒト以外

の動物の被験体も含む)の行動を観察し概念化したことに始まる。つまり、本人が主観的にどう思っているのかは、検証の範囲外、概念設定の対象外なのである。なので、上記の「やってもできないから、やらない、もしくは、やりたくない」、「できるかどうかは関係がなく、やらない、もしくは、やりたくない」という表現も厳密には妥当ではなく、実際は「やってもできないから、この人は、やらない、もしくは、やりたくないのであろう」、「この人はできるかどうかは関係がなく、やらない、もしくは、やりたくないのであろう」とするのが適切である。つまり、心理学における無気力に関する先行研究は、研究者からみて無気力にみえる行動を対象としている。第3者視点における客観的な観察は、心理学領域に限らず科学的研究法の基本中の基本であるため、こうした先行研究が不適切なものではない。しかし、冒頭の日常生活において個人が主観的に知覚する無気力の改善、解消に寄与できるものではないだろう。個人が主観的に経験する自らの意欲の低下の認知としての無気力と、第三者として客観的に観察した際の行動に対して、その原因として一方的に推測して付与される無気力であるという評価は別の現象である、と捉えるべきである。

本論はかつて心理学領域において提唱され、日本において一時的に研究が盛んであったスチューデント・アパシーについて、研究が廃れた理由と現代社会において意義がある概念となるために再解釈、再定義を試みることを目的とする²。

1. 無気力の行動的側面（客観的無気力）と認知的側面（主観的無気力）

本項では、スチューデント・アパシーの再概念化に関する検討に先立ち、一般社会における無気力に対して寄せられる関心について整理し、学術的な研究を行う社会的な意義について述べる。

長内（2010）は、無気力は日常的な生活においては、「最近、無気力で何もしたくない」「モチベーションが上がらない」「○○しなければならぬけれど、やる気がでない」などのように、自己の意欲の低下に対する知覚（自覚）である、としている。続けて、こうした心理的な状態は、頻度にこそ個人差はあれども、誰もが経験したことのある感覚であろう、と述べている。そしてこの感覚は、個人にとって歓迎できない心理的状态であり、その状態からの脱出を図ることを試みる人が多いためか、世間一般では実証的な根拠に乏しい無気力に対する対処法（書籍、セミナー、エナジードリンク等）が数多く存在し、社会的な関心が高いテーマである、としている。

また、他方では、「最近の学生は無気力だ」「やる気のない部下ばかりで困る」「わが子のやる気のなさが心配」などといったように、他者の意欲を一方的に解釈（推測）する際に、無気力という言葉を用いる場合も多いことも指摘している（長内、2010）。そして、こちらも、一般的に広く問題とされている無気力であることを、白潟（2007）等の一般書（非学術書）の存在を論拠に主張している。

上述した2つの無気力について、長内（2010）は、無気力には自己の意欲の低下を知覚すること（認知的側面の無気力）と、他者の行動について言及すること（行動的側面の無気力）があり、双方は無気力の異なる側面である（Figure 1）、としている。前者は主観的無気力、後者は客観的無気力と呼ぶこともできるのである。

以上のことから、双方とも上述した通り社会的な関心は高く、心理学的な側面からの貢献が可能なテーマであると考えられるため、研究の対象とする意義がある。

しかし、両者の無気力は、同一の現象であると考えすることは適切ではなく、それぞれ個別に検討すべきであるといえる。「側面」という語を用いているので誤解を招くかもしれないが、1つの現象の2つの側面ではなく、

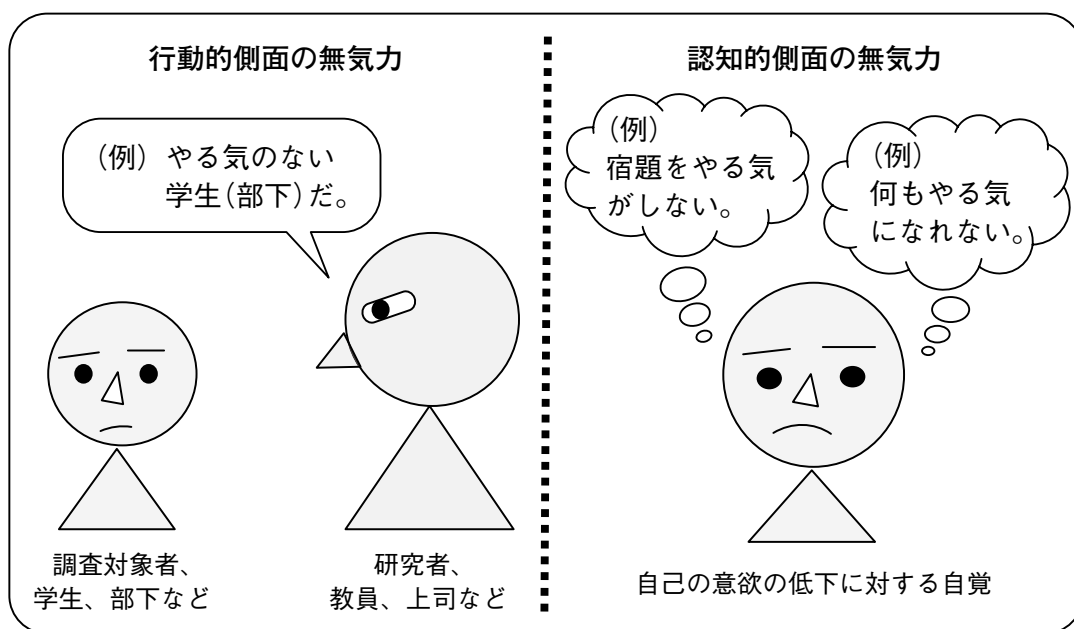


Figure 1 長内 (2010) による無気力の2つの側面

全く別の現象であることがありえる。なぜなら、認知的側面の無気力は、端的に述べれば、自らの意欲のなさに対する自覚であるので、ある種の自己評価である。場合によって、思うように行動に移せないことを、やる気に帰属する原因帰属である場合も多分にあるだろう。それに対して、行動的側面の無気力は他者の行動に対するある種の他者評価である。

そのため、認知的側面の無気力は、調査対象者からの自己報告によってその状態を研究者が把握することが可能である。それに対して、行動的側面の無気力は、客観的に観察可能な行動を指標にすることが可能である。しかし、行動的側面の無気力の研究は、あくまでも「研究者からみて無気力にみえる行動」を研究していることに研究者自身が自覚的でなければならない。なぜなら、仮に行動的指標によって認知的側面の無気力の研究を試みれば、それは、以下の3つの現象を混同してしまう危険性を含んでいる。まず、調査対象者が主観的に無気力を知覚しており、なおかつ他者からみても無気力という状態、次に本

人は意欲的ではある（つまり、無気力を知覚していない）が、他者からは無気力であると評価されるという状態、最後に本人は無気力を知覚しているが他者からは意欲的である（無気力ではない）と評価されるという状態である。この無気力をめぐる3つの現象は明らかに異なると考えられるため、行動的側面の無気力を研究する際は、あくまで研究者からみて無気力にみえる行動を研究しており、認知的側面は考慮しないといった注意が必要である。

加えて、研究を行う社会的意義の面からも両者は異なる。認知的側面の無気力に対する社会的意義は、記述した非専門的な著書などの売り上げから容易に見出すことができる。本人が知覚している無気力、というある種の苦痛を低減させることを目指すための研究となるため意義深い。しかし、行動的側面の無気力に対しては、研究を実施する社会的意義を見出しにくい。なぜなら、行動的側面の無気力に困るのは本人ではなく、本人を取り巻く周囲の人間であり、その行動を無気力であ

ると判断するのも他者である。例えば、多くの上司は部下が指示通りに働いてくれることを望み、多くの教師や親をはじめとする養育者は学生（または、子ども）が勉強に熱心に取り組むことを望み、その期待に応じない者を彼ら自身のやる気のせいだと、彼ら自身の意欲に帰属して解釈することによって、行動的側面の無気力は成り立っている（行動的側面の無気力という用語は用いてはいないが、同様の懸念を示す教育学的または臨床心理学的な考察は少なくない。例えば、神村, 2000）。行動的側面の無気力、つまり人からみたやる気のなさというのは、上記のように、本人の主観的な無気力とは関連せず、他者から一方的に解釈されたものとなる危険性を含んでいる³。そして、行動的側面の無気力を研究することの最終的な目的は、極論すれば他者の行動を都合良く制御することに行き着くといえる。そのような研究は、倫理的、人道的に許容されるべきではないであろう。そのため、行動的側面の無気力を研究することに社会的な意義は見出しにくいといえる。

2. スチューデント・アパシーに関する 先行研究

本論では、スチューデント・アパシー概念の再解釈を目指すものである。そのため、学習性無力感やそれを応用した一連の研究（Overmier & Leaf, 1965; Overmier & Seligman, 1967; Seligman & Maier, 1967; Seligman, 1975; Abramson, Seligman, & Teasdale, 1978; Abramson, Metalsky, & Alloy, 1989; 三井, 1983; 大芦・平井, 1992; Peterson, Maier, & Seligman, 1993; 下坂, 2002; 波多野・稲垣, 1981; 水口, 1985; 宮田, 1991; 牧・関口・山田・根建, 2003; 牧・関口・野村・根建, 2007; Lewis, 1976; 金光, 1997）、無力感と無気力の相違を指摘する研究（大芦, 2005; 高山, 2006）、無気力を抑うつと同義の概念として扱った研究（桜井, 1995, 1997, 2000,

2002; 水谷, 1994）、さらに、抑うつ状態、うつ病、統合失調症、認知症の症状としての無気力を検討した研究等への言及は省略する。

スチューデント・アパシーはその概念が混乱し明確化されぬまま研究数が減少していった特異な研究領域である。スチューデント・アパシーについては、下山（1996）などのレビューもあるが、本論文では、認知的側面の無気力の研究を行う上で、スチューデント・アパシーが先行研究として、どのような位置づけになるのかを概観する。

2.1 Walters によるスチューデント・アパシー理論

真面目な男子大学生が、あるときから急に授業に対する意欲を失い、欠席が増え、試験を受けない状態が慢性化してしまい、留年・退学に至る場合がある。このような学習面での意欲の低下に注目し、Walters（1961）が最初に、アメリカの学生の症例に対してスチューデント・アパシーと命名した。Walters のスチューデント・アパシーの概念は、複雑なものであるが、下山（1997）などは、その要点を以下のようにまとめている。1) 情緒的働きの減退、無気力、無関心、知的無力感、肉体的気怠さ、空虚感、情緒的ひきこもり、社会的参加の欠如がみられる。2) 無関心は予期される敗北、屈辱、制限に対する心理的恐怖を避けるための行動である。3) 攻撃性や競争的衝動のために、他人を直接傷つけることを避ける行動である。4) ただし、回避によって他者をどうしようもない状況に陥れて攻撃衝動を満たす。5) 男らしさ形成をめぐる、解決しがたい葛藤のため青年期を遷延させている男性の青年期における発達の障害である（青年期後期、特に大学2年時に生じやすい）。6) 価値の尺度を学業達成だけに限定したことの結果生じたものである。7) 恐怖状況が解決されれば元に戻るものと、長期間続くものがある。しかし、いずれも精神病に近づくことはなく、神経症に近い。

以上のように、Waltersのスチューデント・アパシーの概念は、単に学業面での意欲の低下のみではなく、その状態に至る要因についても考察している。しかし、Walters (1961)以後、アメリカにおける研究は途絶えてしまう(下山, 1996; 高山, 2006)。

2.2 スチューデント・アパシーに関する研究の日本における発展

そして、スチューデント・アパシーの研究は、その後、日本において独自の発展を遂げてきた。ちなみに、英語圏の無気力 (apathy) の研究は、認知症 (dementia) に関するものが圧倒的に多い。加えて、スチューデント・アパシーという用語を表題に掲げる著書としては、Babbage (1998) などがあるが、上記は教育者からみて無気力にみえる学生に対する指導方法について書かれたものである。こうした状況から、スチューデント・アパシーは、基本的に日本特有の青年期の障害と考えることが定着している(例えば、笠原, 1984, 1988; 下山, 1996)。近年では韓国においても、スチューデント・アパシーがみられるとする見解もある(例えば、李, 2000, 2001, 2004)が、その研究数は少ない。このように、スチューデント・アパシーは、特に日本において研究されてきた。しかし、研究が発展するにつれて、スチューデント・アパシーの概念は、Waltersのものとは、異なるものがみられるようになっていった。例えば、スチューデント・アパシーを青年期特有の病理と捉える立場と、特定の年齢に限定せず非病理的なもの、すなわち認知的側面の無気力(スチューデント・アパシーではなく単なるアパシーという用語を用いるなど)と同義に捉える研究が存在する。また、現状では両者の研究はしばしば混同されている。

(1) スチューデント・アパシーを病理として捉える立場

まず、スチューデント・アパシーを病理と

して捉える立場について代表的なものを概観する。笠原 (1984) は、高学歴志向社会における精神病理現象としてスチューデント・アパシーを考察した。笠原の考察ではスチューデント・アパシーを発症するのは学生に限ったものではないとし、スチューデント・アパシーを退却神経症 (withdrawal neurosis) とよぶことを提唱している(笠原, 1988)。その特徴は、主症状として無気力、無関心、アンヘドニア (anhedonia) があり、この場合の無気力は、学生にとっての学業や職業人にとっての仕事など、社会生活の中心領域に対する選択的、部分的なものであり、その点が統合失調症やうつ病と異なるとしている。笠原はスチューデント・アパシーについて多くの考察を行っているが、その概念を概観すると、①アイデンティティの葛藤と進路の喪失、②アンヘドニア、③勝敗や優劣の決まる競争的場面からの退去、④発病前の性格として強迫的で勝敗に対して過敏であり、回避傾向があるとする記述が多い。しかし、笠原のスチューデント・アパシーの概念は、行動的側面の無気力を扱っているといえる。例えば、上述の学生にとっての学業や、職業人にとっての仕事が彼・彼女らにとって社会生活の中心領域とする視点は一般的ではあるが、本人がそれを自ら社会生活の中心領域と捉えているか否かは考慮されておらず、あくまで笠原自身の視点からの考察であることに留意する必要がある。

次に、山田 (1984, 1987, 1990) のアパシーの概念について概観する。山田は、大学の保健センターでの自らの臨床経験に基づき、長期縦断的な観点から考察を行っている。山田はスチューデント・アパシーについて、選択的退去を主とする「静かなアパシー」と、追いつめられて退却行動と神経症症状を繰り返す「騒々しいアパシー」があるとしている。しかし、山田の長期縦断的な観察によれば選択的退去と完全退去は連続的であり、次第に神経症症状と完全退去が繰り返し生じるよう

になると指摘している。ここでの選択的退去とは学生の本業とされる学業への意欲低下を指し、完全退去とは学業のみに留まらない意欲低下を指す。このようにスチューデント・アパシーの概念に学業以外の意欲の低下も含めたことが、山田の独自性であるといえる。また、山田は神経症とスチューデント・アパシーを同義に捉えており、スチューデント・アパシーを独立した新たな病理として捉える笠原の見解に懐疑的でもある。加えて、山田は家族関係、特に母子間関係をスチューデント・アパシーの要因として考えており、この点もまた山田の独自の考察であると考えられる。

続いて、土川（1990）は、Figure 2のような、スチューデント・アパシーの分類構造を提案した。この分類によれば、スチューデント・アパシーは典型例としてのものと神経症としてのものに大別されている。典型例としてのスチューデント・アパシーとは、軽度の人格障害の範囲内に入る特有の人格の上に生じるとされ、Figure 2のとおりⅠ型とⅡ型に

分類されている。Ⅰ型とは受身回避型であり、Ⅱ型とは自己愛型であると説明している。そして、典型例を基準としてその下に「発達過程における一過性のアパシー」と、さらにその下に「一般学生のアパシー傾向」を位置づけており、病理的なスチューデント・アパシーと一般学生（病理的でない学生）のアパシー傾向を区別することを提案している。

そして、下山（1995a）は先行研究におけるスチューデント・アパシーの概念の混乱を指摘した上で、臨床事例から、「悩まない」行動障害、「悩めない」心理障害、「自立適応強迫」性格からなる3次元構造モデルを提案し、スチューデント・アパシーを人格障害のひとつとして扱うことを提案している。「悩まない」行動障害は「回避」「否認」「分裂」、「悩めない」心理障害は「自分のなさ」「実感のなさ」「張りのなさ」、「自立適応強迫」性格は「強迫性」「受動的適応性」「自己愛的自立性」から構成されている。そして、3次元間の関係について、Figure 3のような悪循環する障害の形成システムとして説明している。下山の

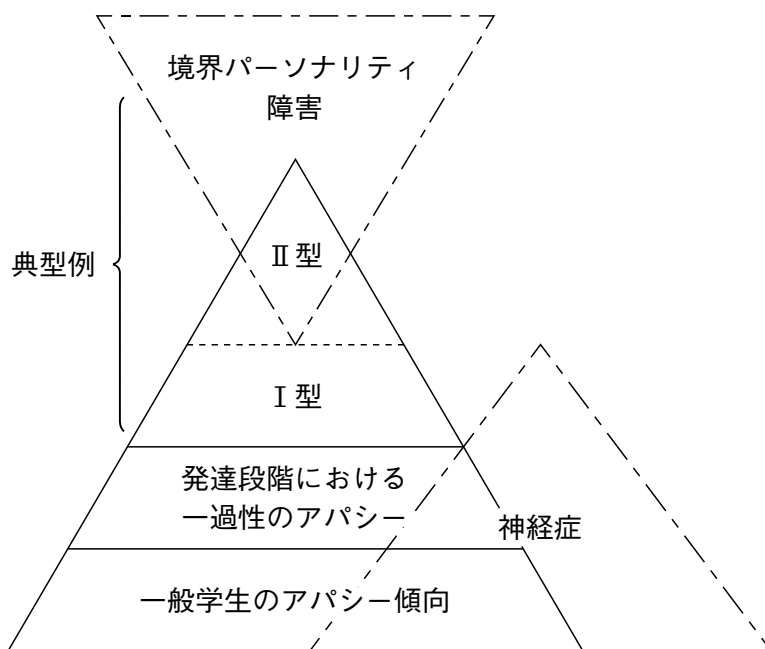


Figure 2 スチューデント・アパシーの分類構造（土川, 1990）

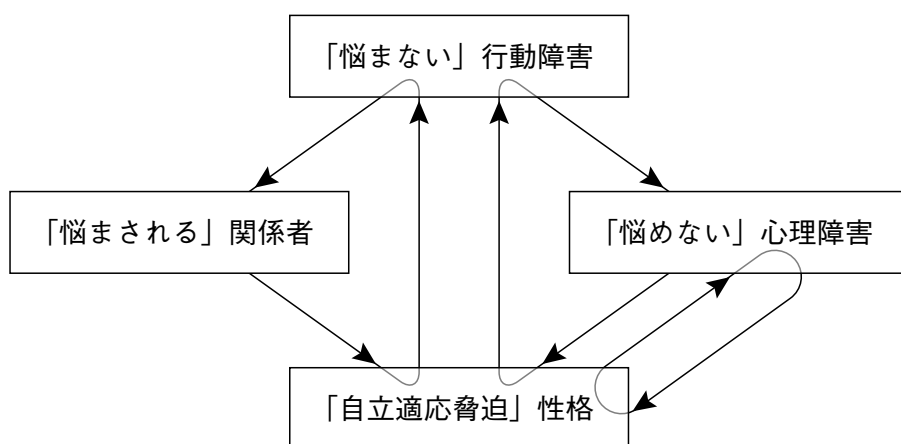


Figure 3 障害としてのスチューデント・アパシーの形成システム（下山, 1997）

一連の研究では（例えば、下山, 1997）、このモデルにしたがってロールシャッハ・テストや面接といった事例研究に加え、実証的な研究も実施されており、スチューデント・アパシーに関する研究の中では貴重な包括的なものとなっている。また、下山（1994）は、スチューデント・アパシーが問題とされているのは、自覚症状がないために、周囲の困惑を招くため、だとしている。こうした記述からは、病理としてスチューデント・アパシーを捉える立場は、本人が困る無気力（認知的側面の無気力）ではなく、研究者、教育者、家族など周囲からみた無気力（行動的側面の無気力）に、焦点を当てていることがわかる。

以上のように、スチューデント・アパシーを病理として扱う立場について代表的なものを概観したが、その他の多くの研究も臨床的な事例研究や心理学的または社会学的な考察（例えば、高野, 1988；土川, 1981；岡庭, 1983, 1984, 1985；高橋, 1996）が多く、実証的な研究が、少ないこともこの研究領域のひとつの特徴である。実証的な研究には、東大パーソナリティ・インベントリーの項目を用いて、スチューデント・アパシーを測定する尺度を開発しようとした試み（田中・斎藤・林・関根・後藤・内藤・山本・大森・橋本・高頭・矢花, 1990）や、抑うつを測定する尺度の得

点を、スチューデント・アパシー得点とみなす研究もある（佐藤, 2001）。こうしたことから、病理としてスチューデント・アパシーを捉える立場のなかでも、統一された定義が存在しないことがうかがえる。同時に、サークルやアルバイトなどには熱心であるが、学業に意欲のないことを指摘する記述は多い（例えば、鉄島, 1993；江川, 1995）。また、どの定義も研究者からみて、無気力にみえる他者の状態を記述的に表しており、本人の自覚症状は実際のところは考慮されていない（例えば、山口, 1999）。

（2）スチューデント・アパシーを非病理として捉える立場

続いて、非病理的で、日常生活において誰しもが経験しうる認知的側面の無気力を研究の対象としているが、結果的にスチューデント・アパシー傾向を研究している立場について述べる。この立場の多くは、スチューデント・アパシーという用語を用いずに、無気力傾向、アパシー傾向といった用語を用いて、非病理的で、なおかつ学業に限定されない無気力を明らかにしようとしている。しかし、使用する尺度や概念の定義を精査すると、結果的に一般学生などの健全な個人を対象として、病理的なスチューデント・アパシー傾向

を研究していることがわかる。

鉄島（1993）は、アパシー傾向を「精神病の無気力と異なり、心理的原因で主として学生の本業である学問に対して意欲の減退を示すこと」と定義した。そして、一般大学生の無気力を測定するための、尺度を開発した（授業からの退却、学業からの退却、大学生活からの退却の3つの下位尺度からなる）。しかし、この尺度は上記の下位尺度からもうかがえるように、一般大学生のごく限られた生活領域の意欲の低下を扱っている点で、一般大学生を対象にしてスチューデント・アパシー傾向を研究している。このような、一般大学生を対象に非病理的な無気力の研究を試みてはいるが、使用した尺度などの方法論の問題で結果的にスチューデント・アパシー傾向を扱ってしまっている研究には、橋本（2002）、狩野・津川・坂本・時田（2004）、狩野・津川（2005, 2007, 2011）、長内（2006）、李（2000, 2001, 2004）、徳村（2007）などがあげられる。

また、下山（1995b）は、先述した3次元構造モデルと対応する、病理としてのスチューデント・アパシーの心理性格特徴を測定する「アパシー心理性格尺度」と、一般大学生の意欲低下を測定するための「意欲低下領域尺度」を開発した。しかし、意欲低下領域尺度は、事実上、鉄島（1993）の尺度の簡易版である。尺度名は意欲低下領域と改変してあるが、項目内容は鉄島と同様に学業に関するもののみであるので、結果としてスチューデント・アパシー傾向を測定する尺度であることがわかる。そのため、一般大学生が日常的に感じる無気力とは異なる可能性が高い。意欲低下領域尺度を用いた研究には、白石・岡本（2005）などがあげられる。

下山（1995b）や鉄島（1993）以外の尺度を用いた、一般大学生の非病理的な無気力を対象とした研究には、宗像（1997）がある。宗像は、無気力の性差について実証的に検討しているが、作成した尺度に関して不明な点が多いため、追試研究などが行えない状況に

ある。

このように非臨床群を扱った無気力の研究でさえも、その意欲の低下の対象が学業領域のみに限定されていることから、現代の大学生が学業に限らない日常生活で、実際に感じている無気力を測定するには不適切であり、別途詳細に検討する必要性が提案されている（長内, 2006; 徳村, 2007; 高山, 2006）。

最後に、時間的展望（time perspective）や自我同一性（identity）の研究における関連要因として、スチューデント・アパシーを想定し、上述した鉄島の尺度などが用いられることも少なくない（例えば、杉山・神田, 1996）。しかし、スチューデント・アパシー自体の概念が明確化されない間に、このように青年期の問題に関連する変数として扱われたことが、当該分野の混乱に拍車を掛けた一因であるともいえる。

以上のように、スチューデント・アパシーに関する一連の研究では、教育者や研究者の視点から、アルバイトやサークル活動には熱心であるにもかかわらず、学業に対してのみ意欲が低下しているような学生を病理として扱ってきた。この無気力の領域固有性がスチューデント・アパシーに関する研究のなかで比較的一致する症状とされており、同時にこの領域固有性こそがスチューデント・アパシーが病理とされる所以でもあると考えられる。また、病理的なスチューデント・アパシーではなく、一般大学生が日常的に経験する認知的側面の無気力の研究を目指した立場でも、学業に対する意欲のみを測定する尺度を用いていることから、結果として病理としてのスチューデント・アパシー傾向の研究となってしまうものも多いことが明らかになった。このようにスチューデント・アパシーの一連の研究では、無気力の病理・非病理の区別が不明確であることも、この研究領域の特徴のひとつであるともいえる。

3. 健常な個人が日常生活で知覚する 無気力の先行研究

健常者の病理的でない認知的側面の無気力に関しては事例的な研究が多いが、実証的な研究は少ない、との指摘がある（例えば、高山, 2006）。平井・松原・沢村（2006）は、無気力（彼らはアパシーという用語を用いている）を「やらなくてはいけないのに、やる気がでない」というような、意欲が減退してしまい、物事に積極的に取り組む気持ちになれない状態とした上で、事例研究を行っている。その他の事例や考察などの質的な研究には、稲村（1989）、深谷（1990）、松原（2005）、大芦（2005）、森田（2004）などがあげられる。

実証的な研究としては、笠井・村松・保坂・三浦（1995）は、小学生と中学生を対象として、それぞれ独自に選択した項目で無気力尺度を作成した。笠井他による尺度を用いた研究には、笠井・三浦（1997）や船木・熊谷（2005）、牧（2019）がある。笠井・三浦では、中学生用の尺度において作成時と同様の因子構造がみられたとしているが、小学生用を用いた船木・熊谷では、“結果として笠井他の尺度は、小学生の無気力感の様態を明らかにするものとしては、まだまだ研究の余地がある”、としている。さらに、これらの研究は、研究者の視点から無気力とされる基準が定められていることから、現実の認知的側面の無気力をあらわしているか疑問が残るとされている（高山, 2006）。

そのような中、一般の学生が感じる無気力を「日常生活全般で、自分をやる気がないと感じる」と定義し、自由記述方式で項目を収集して尺度化し、無気力の検討を試みた研究には、下坂（2001）がある。

下坂（2001）は、一般中学生から一般大学生にかけての青年期に共通する無気力を測定するための尺度を作成した。また、高山（2006）も一般大学生を対象に、無気力を測定するための尺度を作成した。両尺度とも一般学生の

病理的でない無気力を測定するための尺度であり、項目の内容は、双方とも広く無気力への関連が予測される状態を問うものである。しかし、下坂の無気力感尺度の項目には、無気力の状態像だけではなく、無気力を引き起こす要因も含まれている。例えば、下坂の無気力感尺度の「私を本当に理解してくれる人は少ないと思う」「私の周りの人たちは面白みにかけると思う」といった項目は、認知的側面の無気力そのものではない。また、高山の尺度も無気力に関係するであろうことは確かではあるが、種々雑多な内容の項目から構成されている。そのため、このような項目群の合計得点の高低が、個人の認知的側面の無気力の強度を表しているかには疑問が残る。

4. 従来の無気力研究の盲点

このように、多くの心理学における無気力に関する研究は、研究者や教育者の視点から、無気力にみえる研究対象者の行動に焦点をあてて行われてきた。特にスチューデント・アパシーの研究では、大学生の学習に関する活動での意欲の低下を行動的な指標としてきた。しかし、こうした研究者によって判断される状態像は、たとえ同じ行動を観察したとしても、時代の風潮や研究者の価値観の影響を受け、解釈が異なることは避けられないだろう。例えば、スチューデント・アパシーの概念が提唱された当時は、勤勉に学業のみに集中する大学生活を望ましいとする価値観をもった教育者や研究者の視点から、学業には意欲的ではないように見えるが、アルバイトやサークル活動には熱心に見える大学生が、病理的な無気力に見えたのであろうと推測できる。このような仮定に基づけば、行動的側面の無気力とは、教育者や研究者自身が期待する行動を、調査対象者が取っていない状態を指しているといえる。そして、その状況に教育者や研究者が不満を抱き、調査対象者が無気力であるから、期待した行動を取らない

のだと、解釈している可能性も排除できない。このように、行動的側面の無気力の研究は、あくまで研究者や教育者からみて、無気力に見える行動の研究であるといえる。おそらく、行動的側面の無気力の研究の知見は、実践的な場面において本人の意向に関係なく、学生や部下のパフォーマンスをマネジメントする目的などでは応用することも可能であろう。しかし、行動的側面の無気力の研究の知見は、上述してきた通り、認知的側面の無気力で悩む個人には必ずしも適用できない。

5. 認知的側面（個人が知覚する無気力）の無気力の研究

上述した背景の中、長内（2010）は、健常な個人が日常的に感じる無気力を「知覚された無気力（perceived apathy）」と名付け、それを「個人にとって知覚された自己の意欲または精神的なエネルギーの低下」と定義し、知覚された無気力は、領域固有的無気力（domain-specific apathy）と領域全般的無気力（domain-general apathy）に大別できるとした。その上で、領域全般的無気力を測定する「無気力状態測定尺度（長内, 2011）」や、領域固有的無気力を測定する測定論（Figure 4）⁴や Visual Analog Scale を応用した測定法（長内, 2009）を考案している。尺度のレビューについては、長内・内間（2021）がある。

知覚された無気力については、その後、大西（2016）や住岡・山本・山内（2024）でその用語が使われており、研究の継承的発展と普及が進みつつある。また、長内（2024）では、大学生を対象に社会人基礎力（経済産業

省, 2006）と個人特性の関連性を探索的に検証することを目的とした研究の中で、モチベーション特性の測定のために無気力状態測定尺度が使用されている。結果は、社会人基礎力高得点群は、アクション・チームワーク未獲得群と比べ、外向性と協調性が有意に高かった。また、モチベーション特性として想定した無気力状態測定尺度の下位尺度得点は、類型間で、いずれも有意差を示さなかったことが示されている。モチベーションの高低は、社会人基礎力の獲得状況とは関連しないことが示唆されている。このことは、学生の本分を仮に社会人になることに向けた準備活動としたとしても、従来のスチューデント・アパシーが想定した領域固有性は実証できない可能性を示しているともいえる。

おわりに

本論はかつて心理学領域において提唱され、日本において一時的に研究が盛んであったスチューデント・アパシーについて、研究が廃れた理由と現代社会において意義がある概念となるために再解釈を試みたものである。スチューデント・アパシーは、提唱者とされる Walters（1961）による概念の要諦を確認すれば、男子大学生がその本分である学業にのみ選択的に意欲低下をおこすことであったが、この概念は大学進学率が低い時代に大学へ進学し、アカデミアの職を得るほどに学問に傾倒した者が、大学進学率が上昇してきたが、女性の大学進学率が低かった時代の学生を対象に概念化したものと現代から振り返ってみると解釈ができるだろう。この前

$$\text{領域固有的無気力得点} = \text{領域への興味・関心得点} - \text{領域への意欲得点}$$

Figure 4 領域固有的無気力得点の算出方法

提にたった上で、スチューデント・アパシーの研究を継続的に蓄積していくのであれば、第一に性差についての仮説は白紙に戻すべきだろう。第二に学業領域における選択的な意欲減退（無気力）という仮説については、長内（2010）が指摘したように学業領域のみの意欲低下（無気力）を測定しただけでは実証的に検証したことにならず、学業以外の活動領域への意欲減退（無気力）も測定し、被験者内（参加者内）計画による統計的検定を行う必要がある。その際、学生の活動領域に関して網羅的に把握する予備研究が必要となる。第三に学生の本分が学業であるという仮説であるが、これはあくまでそのような価値観で自らが学生時代を過ごした、もしくは、自らの立場から学生は学業に熱心であってほしいという期待を持つ教員や保護者（つまり、第三者）が主観的に想定しているものであり、無気力を知覚する学生本人が本分として認識しているものではない可能性が高い。長内（2010）が指摘したとおり、本人にとって問題となる無気力（個人が苦痛を感じることや、改善したいと思う無気力）は、本人にとって大事であり、本人にとって本分であると認識している領域（活動）に対する無気力である。そのため、本人が何を本分に日々生きているのかを測定した上で、個人毎に本分が異なるデータセットでの分析が必要となるだろう。例えば、部活動を本分として認識している大学生が、部活動に対する意欲減退（無気力）がみられ、その他の活動領域に関しては意欲減退（無気力）を呈していなければ、それがその個人はスチューデント・アパシーの状態にあると言えるだろう。この第三の点に、もう1つの研究方法を示すのであれば、各個人の本分を測定するのではなく、学生の本分を就職活動や社会人基礎力等の仕事に結びつく能力の獲得へ向けた活動領域に定めることであろう。多くの学生は学業を本分にし、大学院に進学し、大学教員や研究者になるわけではなく、それを目指しているわ

けでもなく、企業などへ就職するのが実際であるからだ。例えば、その就職活動について特集した雑誌などには、「就職活動に対してやる気が出なくて困っている」などとする読者（大学生）からの相談が掲載されていることも珍しくない（例えば、日経就職ナビ編集部, 2008）。しかも、それは「やりたくないから、やらない」といった自発的な拒否や怠惰と受け止められるものではなく、「就職しなければいけない、就活をやらなければいけない」という気持ちはありますが、積極的に活動する気になれません（日経就職ナビ編集部, 2008）」といった切実さを伴ったものが多い。

引用文献

- Abramson, L. Y., Metalsky, G. I., & Alloy, L. B. (1989). Hopelessness depression: A theory based subtype of depression. *Psychological Review*, **96**, pp.358-372.
- Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., & Teasdale, J. D. (1978). Learned Helplessness in humans: Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, **87**, pp.49-74.
- Babbage, K. J. (1998). *High-Impact Teaching: Overcoming Student Apathy*. Scarecrow Pr.
- 江川 孜成 (1995). スチューデント・アパシー student apathy 真仁田昭・原野広太郎・沢崎達夫 (編) 学校カウンセリング辞典 金子書房, pp.170-171.
- 深谷昌志 (1990). 無気力化する子どもたち 日本放送出版.
- 船本智美・熊谷信順 (2005). 小学生の無気力と学校環境適応感との関係 山口大学教育実践センター研究紀要第19, pp.93-102.
- 橋本泰子 (2002). 心理学的アセスメントによるアパシー傾向の一考察 人間科学研

- 究 文教大学人間科学部, 24, pp.53-66.
- 波多野誼余夫・稲垣佳世子 (1981). 無気力の心理学 中央新書.
- 平井由利・松原達哉・沢宮容子 (2006). アパシー青年へのLAC法の適用事例 カウンセリング研究, 39 (4), pp.47-57.
- 稲村 博 (1989). 若者・アパシーの時代—急増する無気力とその背景 日本放送出版協会.
- 神村栄一 (2000). それはホントに「無気力」だろうか?—自己効力感を育てる 児童心理 No.729 金子書房, pp.61-65.
- 金光義弘 (1997). Learned Helplessness理論の再考と展望. 川崎医療福祉学誌, 7 (1), pp.11-18.
- 狩野武道・津川律子・坂本真士・時田 学 (2004). 大学生における無気力の研究—アパシー傾向測定尺度とSDSを用いて—日本心理学会第68回大会発表論文集, p.349.
- 狩野武道・津川律子 (2005). 抑うつ反応スタイルからみた大学生の抑うつ気分とアパシー傾向の差異 日本心理学会第69回大会発表論文集, p.358.
- 狩野武道・津川律子 (2007). 無気力の二側面としてのアパシー傾向と抑うつとの関係—大学生を対象として— 聖マリアンナ医学研究誌, 7 (82), pp.153-156.
- 狩野武道・津川律子 (2011). 大学生における無気力の分類とその特徴—スチューデント・アパシーと抑うつとの視点から—教育心理学研究, 59, 168-178.
- 笠原 嘉 (1984). アパシー・シンдрローム—高学歴社会の青年心理— 岩波書店.
- 笠原 嘉 (1988). 退却神経症—無気力・無関心・無快楽の克服— 講談社.
- 笠井孝久・三浦香苗 (1997). 中学生の無気力感—学校忌避感情・学校成績との関連— 千葉大学教育実践研究, 43, 424-435.
- 笠井孝久・村松健司・保坂 亨・三浦香苗 (1995). 小学生・中学生の無気力感とその関連 教育心理学研究, 43, pp.424-435.
- 経済産業省 (2006). 社会人基礎力 Retrieved September 5, 2023, from <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>
- Lewis, D.J. (1976). *Learned helplessness: A reply and an alternative S-R interpretation. Journal of Experimental Psychology: General*, 105, 47-65.
- 松原達哉 (2005). 無気力の原因と指導 立正大学心理学部研究紀要, 3, pp.51-56.
- 牧 郁子・関口由香・山田幸恵・根建金男 (2003) 主観的随伴性経験が中学生の無気力感に及ぼす影響—尺度の標準化と随伴性認知のメカニズムの検討— 教育心理学研究, 51, 298-307.
- 牧 郁子・関口由香・野村 忍・根建金男 (2007). 思考の偏りが中学生の無気力感に与える影響—無気力感モデルの検討を通して— カウンセリング研究, 40, 244-256.
- 牧 郁子 (2019). 保護者との情動交流が小学生の無気力感に与える影響—構造方程式モデルによる分析— 教育心理学研究, 67, 223-235.
- 三井宏隆 (1983). Learned helplessness theory: その理論と展開 実験社会心理学研究, 22 (2), pp.143-155.
- 宮田加久子 (1991). 無気力のメカニズム—その予防と克服のために— 誠信書房.
- 水口禮治 (1985). 無気力からの脱出 福村出版.
- 水谷友史子 (1994). 大学生の無気力に関する研究—失敗場面における原因帰属との関連から— 日本教育心理学会総会発表論文集, p.325.
- 森田千穂 (2004). 大学生が抱く無気力感の理解にむけて—日常場面のインタビューからの予備的分析— お茶の水女子大学心理臨床センター紀要, 6, pp.105-114.
- 宗像 剛 (1997). 大学生のアパシー傾向の

- 男女別検討 心理学研究, 67 (6), pp.458-463.
- 日経就職ナビ編集部 (2008). 学生のためのリアル就職本 2010年度版 就職活動ナビゲーション 日経HR, p.204.
- 大芦 治・平井 久 (1992). 学習性無力感に関する帰属理論についての研究 心理学評論, 35, pp.175-200.
- 大芦 治 (2005). 第1章第1節 無気力の心理学の視点 大芦 治・鎌原雅彦 (編) シリーズ 荒れる青少年の心 無気力な青少年の心 北大路書房, pp.1-14.
- 岡庭 武 (1983). 大学神経症研究報告—student apathyのまとめ— 第4回精神衛生研究報告書, pp.36-40.
- 岡庭 武 (1984). 大学神経症研究報告—student apathyのまとめ その2— 第5回精神衛生研究報告書, pp.77-80.
- 岡庭 武 (1985). 大学神経症研究報告—student apathyのまとめ その3— 第6回精神衛生研究会報告書, pp.19-22.
- 大西恭子 (2016). 学業領域固有の知覚された無気力の探索的研究 教育心理学研究, 64 (3), 340-351.
- 長内優樹 (2006). スチューデント・アパシー傾向大学生の主観的な状態像の把握の試み 日本発達心理学会第17回大会発表論文集, p.724.
- 長内優樹 (2009). 知覚された無気力の主観的強度の測定法に関する研究 応用心理学研究, 35 (1), 23-24.
- 長内優樹 (2010). 無気力に関する心理学的研究の展望—健常な個人が日常的に知覚する無気力を研究するために— 応用社会学研究 東京国際大学大学院社会学研究科, 20, 83-94.
- 長内優樹 (2011). 無気力状態測定尺度の作成の試み 東京国際大学大学院社会学研究科 応用社会学研究, 21, 47-53.
- 長内優樹 (2024). 新卒求職者を対象とした社会人基礎力の獲得状況における類型化と類型間の個人特性 (パーソナリティ、モチベーション) の比較—Big Fiveと領域全般的無気力を指標として 神奈川大学経営学部国際経営論集, 67, 37-46.
- 長内優樹・内間 望 (2021). 無気力の自己記入式尺度—2020年時点での展開— 神奈川大学経営学部国際経営論集, 61, 51-58.
- Overmier, J. P., & Leaf, R.C. (1965). Effect of discriminative Pavlovian fear conditioning upon previously or subsequently acquired avoidance responding. *Journal of Comparative and Physiological Psychology*, 60, 213-218.
- Overmier, J. P., & Seligman, M. E. P. (1967). Effects of inescapable shock upon subsequent escape and avoidance responding. *Journal of Comparative and Physiological Psychology*, 63, 28-33.
- Peterson, C., Maier, S., Seligman, M. (1993). *Learned Helplessness. A Theory for the Age of Personal Control*. Oxford University Press, Inc.
- (津田 彰 (監訳) (2000). 学習性無力感—パーソナルコントロールの時代をひらく理論 二瓶社)
- 李 相蘭 (2000). 青年期無気力傾向に関する比較研究—日・韓の大学生を対象に— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 40, 139-150.
- 李 相蘭 (2001). 韓国の高校生における無気力傾向と進学動機の不明確性との関係. 性格心理学研究, 9 (2), pp.102-115.
- 李 相蘭 (2004). 日・韓高校生における無気力傾向に関する比較研究：進路発達との関連に注目して 発達心理学研究, 15 (3), pp.302-312.
- 桜井茂男 (1995). 「無気力」の教育社会心理学—無気力が発生するメカニズムを探る— 風間書房.
- 桜井茂男 (1997). 学習意欲の心理学 自ら

- 学ぶ子どもを育てる 誠心書房.
- 桜井茂男 (2000). 無気力の心理学—動機づけ概念を中心にした無気力発生モデルの検討— 現代のエスプリ (392) 至文堂, pp.61-70.
- 桜井茂男 (2002). 第3部4章 無気力 下山晴彦・丹野義彦 (編) 講座臨床心理学4 異常心理学2 東京大学出版会, pp.165-185.
- 佐藤 隆 (2001). 短大生のモラトリアムとスチューデント・アパシーに関する臨床心理学的調査研究 ストレス科学研究, 16, pp.48-53.
- Seligman, M. E. P. (1975). *Helplessness : On depression, development, and death*. San Francisco: Freeman.
- (セリグマン, M. E. P. 平井 久・木村駿 (監訳) (1985). うつ病の行動学—学習性絶望感とは何か— 誠信書房)
- Seligman, M. E. P., & Maier, S. F. (1967). Failure to escape traumatic shock. *Journal of Experimental Psychology*, 74, 1-9.
- 下坂 剛 (2001). 青年期の各学校段階における無気力感の検討 教育心理学研究, 49, pp.305-313.
- 下坂 剛 (2002). 無気力研究の心理学的展望. 神戸大学発達科学部人間科学センター 人間科学研究, 9 (2), pp.87-96.
- 下山晴彦(1994). つなぎモデルによるスチューデント・アパシーの援助—「悩めない」ことを巡って— 心理臨床学研究, 12 (1), pp.1-13.
- 下山晴彦(1995a). スチューデント・アパシーの構造の研究—モデル構成現場心理学の試みとして— 心理臨床学研究, 13 (3), pp.252-256.
- 下山晴彦 (1995b). 男子学生の無気力の研究 教育心理学研究, 43, pp.145-155.
- 下山晴彦(1995c). スチューデント・アパシーの下位分類の研究 東京大学大学院教育科学研究科紀要, 35, 159-185.
- 下山晴彦 (1996). スチューデント・アパシー研究の展望. 教育心理学研究, 44, pp.350-363
- 下山晴彦 (1997). 臨床心理学研究の理論と実際—スチューデント・アパシー研究を例として— 東京大学出版会.
- 白潟敏郎 (2007). デキる上司 中経出版.
- 白石尚大・岡本裕子 (2005). 大学生の意欲低下傾向とアイデンティティ発達, 家族機能の関連性 青年心理学研究, 17, pp.1-13.
- 杉山 成・神田信彦 (1996). 青年期における一般的統制感と時間的展望—アパシー傾向との関連性— 教育心理学研究, 44, 418-424.
- 住岡恭子・山本康裕・山内裕斗 (2024). 学業領域の知覚された無気力における発達的变化の検討 心理学研究, 95 (2), 138-144.
- 高橋俊彦(1996). 大学生とアイデンティティ—無気力で「不登校」の学生について— 学校保険研究, 38, pp.230-235.
- 高野清純 (1988). シリーズ・やさしい心理学 無気力 原因とその克服 教育出版.
- 高山草二 (2006). 無気力と無力感 動機の期待×価値理論からの分析 島根大学教育学部紀要, 39, pp.45-53.
- 田中千穂子・斉藤高雅・林 行夫・関根 剛・後藤多樹子・内藤静子・山本紀久子・大森椒子・橋本弘美・高藤忠明・矢吹美美子 (1990). アパシー尺度作成の試み (題1報) —TPIによる検討— こころの健康, 5 (1), pp.67-76.
- 鉄島清毅 (1993). 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討— 教育心理学研究, 41, pp.200-208.
- 戸田有一 (2003). 子どもに求められている「やる気」とは—おとなと子どものビミョーなかけひき— 児童心理 (6), p.2.
- 徳村理世 (2007). 大学生の無気力と親子関

- 係 日本心理学会第71回大会発表論文集, p.1126.
- 土川隆史 (1981). スチューデント・アパシー 笠原 嘉・山田和夫 (編) (1981). キャンパスの症候群—現代学生の不安と葛藤— 弘文堂, pp.143-166.
- 土川隆史 (1990). メンタルヘルス・シリーズ スチューデント・アパシー 同朋舎.
- Walters, P. A. J. (1961). Student Apathy Blaine B. Jr. & McArthur C.C. (ed) *Emotional Problem of the Student*, Appleton-Century-Crofts.
- (ウォルターズ, P. A. J. 笠原 嘉・岡本重慶 (訳) (1975). 学生のアパシー 石井完一郎他 (監訳) 学生的情緒問題 文光堂, pp.106-120.)
- 山田和夫(1984). アパシーと父性 精神療法, 10, 149-154.
- 山田和夫 (1987). スチューデント・アパシーの基本病理—長期縦断的観察の60例から— 平井富雄 (監修) 現代人の心理と病理 サイエンス社, pp.350-373.
- 山田和夫(1990). 家族関係の中でのスチューデント・アパシー 土川隆史 (編) スチューデント・アパシー 同朋社, pp.140-177.
- 山口正二 (1999). アパシー 中島義明 (編) 心理学辞典 有斐閣, P.14.
- 3) 他者からみて無気力にみえる状態 (行動的側面の無気力、客観的無気力) が研究の対象となることが多かったのは、我々の社会が人前で無気力にみえることを否定的に捉える慣習を備えていることに一因を求めることができるのかもしれない。例えば、大相撲における「無気力相撲」等、多くのコンタクトスポーツ (特に、格闘技) において、客観的に意欲的でないと捉えられることは減点の対象である。本人は勝とうとして不用意に攻めないわけであり、主観的にやる気がない (認知的側面の無気力、主観的無気力) わけではないだろう。無気力という語は、私的な関係性においては自己評価として吐露されることがあるが、社会的な場では他者評価として用いられる語なのかもしれない。
- 4) 長内 (2009) によれば、「やるべきだと思っているのに、やる気がでない (興味・関心があるのに、意欲がでない)」という自覚のある (知覚された) 無気力を測定するために、様々な領域に対する意欲の主観的強さの測定と同時に、教示を変えて同様の領域に対する興味・関心の強さも測定し、調査用紙を回収した後に、個人別に領域ごとの興味・関心得点から意欲得点を差し引いた値を領域固有の無気力得点とすることが提案されている。

注

- 1) 事実、学習性無力感の知見は、現実場面ではそのように応用されている。例えば、戸田 (2003)。
- 2) 本論は、2011年 (平成23年) に学位請求論文として、大正大学に提出を予定していた論文の一部、及び、左記を元に2016年 (平成28年) に吉備国際大学にて学位請求論文として作成中であった論文の一部に大幅な加筆修正、編集を加えたものである。